もの、ウオードの社會學界に於ける地位は今更說くまでもなく、デイーレーはまた約說者として其人を得て居ると云ふ事が出來やう。生物學的知識に根柢を置けるワオードの社會學の大體を知りたいと云ふ人には、最も恰好の書である。今藤森氏の手に譯せられて邦語によりて其內容に接するを得るに至つた事は誠に喜ばしい事である。たゞ譯文がも少し碎けてゐて平明であつたならばと思ふ。少くとも初學の人にとりては難解の感を免れざる事を遺憾とせざるを得ない。定價一圓五十錢、東京神田中猿樂町一、巖松堂書店發行（高田保馬）。

靈魂信仰と祖先崇拜　文學士　桑田芳藏著

日本に於ける心理學上の獨創的研究を集成するために刊行された『心理叢書』の第一册である。靈魂の信仰と祖先崇拜につきては數十年以前から宗教起源論又は社會進化論の立場から、或は文化史的に或は人類學的に研究され、其具體的記述並に說明は既に數多く公けにせられて居るが、是等現象の內面的動機を純粹心理學的に考察することはヴント氏意外に餘り多く企てられて居ない、殊に東洋に於ける最も發達した形式に此方法を以て研究したものは全くないのである。本書は此要求に應じて公けにせられたものと思はれる。著者は此民族心理學の立脚地を嚴守して、一切の價値論を離れて純科學的觀察を爲されて居る。

內容は四篇に分たれ、第一篇に靈魂信仰が本來いかにして生ぜしやを觀察し。第二篇にトーテミズムの性質と起源とを論じて、動物祖先が人間先祖の前階を成すことを知らしめ、第三に靈魂信仰に自然に伴ひ起るべき他界表象を研究し、最後に第四篇に祖先崇拜の起源と發展とを說述され、尙餘論として祖先崇拜の運命につきて一言せられて居る。

論の結構はヴント氏に依つて出發せられたのであらうけれども、行論悉く根本資料と參照し、師の說を補充改訂された點が甚た多い。論辯穩健極めて平明に、然も飽くまで眞摯な科學者の態度を保持されて居る。本書に引用された著述の多くは千頁以上數千頁に及ぶ廣範なものであるのに、僅々百七十頁の內に要領を悉く包攝されたのは非常な功績と云はねばならん。東京市外上駒込一二〇心理學研究會出版。定價七十五錢。（石神德門）

寄贈書籍雜誌

生命の一路　畔上賢造著　洛陽堂
我等何を信ずべき乎　トルストイ著　加藤一夫譯　同
ハイネ評傳　文學士　藤浪由之著　同
靈魂信仰と祖先崇拜　文學士　桑田芳藏著　心理研究會出版部
現代批判第二輯　稻垣末松外三氏著
哲學雜誌、心理研究、丁酉倫理會講演集、東洋哲學、六合雜誌、東亞之光、神學之研究、早稻田文學、教育、普通教育、教育研究、東京教育、奈良縣教育、岐阜縣教育、三重教育、長崎縣教育雜誌、愛媛教育、信濃教育、佐賀縣教育、藝備教育、宮城教育、靜岡縣教育、大崎學報、黑潮、教育學術界、教育界、學校教育、第三帝國